

1. はじめに

いわゆる「イスラーム世界」では、概して、人々の往来が盛んであったとされる。しかし、羽田正は近年、「イスラーム世界」という概念設定がいくつもの問題をはらんでいることを指摘した上で、そもそも「イスラーム世界」をカバーする前近代の歴史書はアラビア語世界史書の一部に限られていたという見解を示した。ただし、それは僅かな歴史書の内容を概観しただけで得られたものである。より多くの歴史書を精査し、著者たちの世界認識や知的ネットワーク、およびそれらの時代による変化を明らかにしていく必要がある。

また通説では、モンゴル帝国支配時代（13世紀半ば–14世紀半ば）に続くポスト・モンゴル期（14世紀半ば–15世紀末）には、地方史や王朝史に歴史叙述の比重が移ったとされる。しかし、モンゴル帝国支配時代に活発化した人・モノ・情報の広範な往来は、ポスト・モンゴル期にも継続して見られ、このような状況を反映して、エジプト、シリアを領有したマムルーク朝（1250–1517）治下で著された歴史書には、イラン、アナトリア、マグリブなど異国に関する情報も少なからず記録されている。

以上を踏まえ、本研究は、異国に関する情報と情報源・典拠を手がかりに、ポスト・モンゴル期マムルーク朝のアラビア語歴史叙述が対象とする地理的範囲（地域性と普遍性）、および当時の情報網、知的ネットワークの広がりをも明らかにすることを目的として設定した。具体的には、マムルーク朝を代表する歴史家マクリーズィー *al-Maqrīzī* (1364–1442) の同時代人の伝記集 *Durar al-‘uqūd* を主要史料に、同書中の異国の支配者や知識人の伝記を検討する予定であった。しかしながら、その後、Joseph Drory が既に同様の研究をしているらしいと知り、*Durar al-‘uqūd* に収録されているマクリーズィーの師イブン・ハルドゥーン *Ibn Khaldūn* (1332–1406) の詳細な伝記を、他の史料と比較することに計画を変更した。

2. イブン・ハルドゥーン諸伝

イブン・ハルドゥーンは、「イスラーム世界」を代表する歴史家・思想家である。チュニスに生まれ、諸学を修めた後、マグリブ、アンダルスの諸政権に仕え、波乱万丈の政治生活を送った。1382年以降はカイロに移住し、学院の教授や裁判官を務め、その間、シリアに攻めてきたティムール (d. 1405) とダマスカス郊外で会見したこともある。彼が有名なのは、その歴史書『範例の書』冒頭の『歴史序説』に書かれた斬新な社会理論のためであり、もはや数え切れないほどの研究がある。日本でも、森本公誠による『歴史序説』の全訳やイブン・ハルドゥーンの評伝などが出版されている。また最近、Allen James Fromherz、Robert Irwin が相次いで評伝を発表した。しかし、いずれの評伝も主と

して依拠しているのは、イブン・ハルドゥーンの自伝 *Ta'rif* である。たしかに *Ta'rif* は、イブン・ハルドゥーンの生涯を論じる際に、まず参照すべき第一級の史料である。だが、かつて Walter J. Fischel が指摘したように、*Ta'rif* はイブン・ハルドゥーンの私生活と公的活動の全貌を漏れなく伝えてはおらず、彼自身が後世見られ評価されたいと望んだ姿を「選択的に」描いたものである。それゆえ、イブン・ハルドゥーンについて知るには、彼の同時代人や少し後代の人々による伝記も、自伝に劣らず重要である。しかるに、これら Fischel のいう「アラビア語外部史料 external Arabic sources」は、これまで十分に研究され活用されてはこなかった。そこで以下では、イブン・ハルドゥーンに関する「アラビア語外部史料」とそれら相互の関係を検討し、著者たちの知的ネットワークの広がりについて考えてみたい。

2.1. 同時代のマグリブ・アンダルスの著者たち

グラナダのナスル朝 (1232–1492) の宰相にして文人イブン・ハティーフ Ibn al-Khaṭīb (1313–74/75) は、そのグラナダに関する著書 *Ihāta* に、イブン・ハルドゥーンの長い伝記を載せており (*Ihāta*, iii, 497–516)、その中にいくつか独自の情報が見られる。まず、イブン・ハティーフによれば、名祖ハルドゥーンの孫がムハンマド、曾孫がイブラーヒームであるのに対して、イブン・ハルドゥーン自身はムハンマドを飛ばし、イブラーヒームを名祖ハルドゥーンの孫としている (*Ta'rif*, 1; 「イブン・ハルドゥーン自伝 1」, p. 49)。イブン・ハルドゥーンは自伝に挙げた系譜に脱落があることを自ら認めており、後代の伝記で言及されるのは、専らイブン・ハティーフが伝える系譜の方である。また、*Ihāta* にのみ見られる情報には、イブン・ハルドゥーンの初期の著作がある。さらにイブン・ハティーフは、イブン・ハルドゥーンがグラナダに渡ってきた直後、ヒンドという名のヨーロッパ人の女奴隷を妾にしたと述べる。イブン・ハルドゥーンの私生活に関わる、些細だが、興味深い話である。

イブン・アフマル Ibn al-Aḥmar (ca. 1324–1404/05?) は、マグリブ西部を支配したマリーン朝 (1269–1465) に亡命したナスル朝の王族の末裔である。彼の書記官僚の伝記集に、イブン・ハルドゥーンの伝記が収められている (*Mustawdi' al-'alāma*, 64–65)。その中でイブン・アフマルは、イブン・ハルドゥーン的能力を賞賛する一方、イブン・ハルドゥーンがその野心のせいで故郷を去らねばならなかったと付け加える。またイブン・アフマルは、イブン・ハルドゥーンの弟ヤフヤーが殺害されたのは、イブン・ハルドゥーン責任だと述べる。

マグリブ・アンダルスで、イブン・ハルドゥーンの伝記を同時代に著したことがわかるのは、以上2人のみである。次に、東方に目を向けてみよう。

2.2. 同時代のマシュリクの著者たち

エジプトの歴史家イブン・フラート Ibn al-Furāt (1334/35–1405) の年代記は、残念ながら

断片的にしか伝存しておらず、最後の部分は 1387-97 年の記述である。それでもこの年代記から、エジプトにおけるイブン・ハルドゥーンについて、いくつかのことを知ることができる。例えばイブン・ハルドゥーンは、カイロのバイバルス修道院の院長に就任するにあたり、院長は同修道院のスーフィーから選ばれることになっていたため、院長就任前に 1 日だけスーフィーとして同修道院に滞在したという (*Ta'rikh*, ix, 65)。イブン・フラートはまた、当時権勢をふるった執事長 Jamāl al-Dīn Maḥmūd b. 'Alī (d. 1397) が金を預けていた人物の 1 人がイブン・ハルドゥーンであり、執事長が投獄され、財産が没収された際、イブン・ハルドゥーンの家でも 2 万ディーナールが発見されたと述べる (*Ta'rikh*, ix, 435-436)。イブン・フラートの主要な典拠が、彼の友人で歴史家のイブン・ドゥクマーク Ibn Duqmāq (1349-1407) の歴史書であることは知られており、イブン・ハルドゥーンに関しても、1 箇所、イブン・ドゥクマークを情報源とする逸話を伝えている (*Ta'rikh*, ix, 365)。しかし、イブン・ドゥクマークの歴史書も断片的にしか伝存していないために確実にはいえないが、イブン・ハルドゥーンについてイブン・フラートが述べていることの多くは、彼自身の見聞によるものではないかと思われる。

シリアの歴史家イブン・ヒッジー Ibn Hījī (1350-1413) の年代記には、イブン・ハルドゥーンの短い死亡録がある。それによれば、イブン・ハルドゥーンの誕生日はヒジュラ暦 732 年第 12 月 23 日であり、それはタードリー al-Tādī といふ人物がイブン・ヒッジーに、イブン・ハルドゥーンは自分よりも 7 日早く生まれたと語ったからだという (*Ta'rikh*, 726)。このタードリーはヒジュラ暦 732 年の大晦日に生まれたらしいので (Ibn Qāḍī Shuhba, *Ta'rikh*, iv, 195-196)、イブン・ヒッジーはそこからイブン・ハルドゥーンの誕生日を計算して導き出したようである。しかしこの誕生日は、後述のように、イブン・ハルドゥーン自身が主張する日付とは異なっており、間違いであろう。

主にカイロで官僚、裁判官、学者、歴史家として活躍したアイニー al-'Aynī (1361-1451) は、その年代記に、イブン・ハルドゥーンの比較的詳細な死亡録を書き残している (*Iqd al-jumān*, foll. 81b-82a)。イブン・ハルドゥーンの生年が誤ってヒジュラ暦 733 年とされてはいるものの、マグリブ、アンダルス、エジプトにおける経歴が辿られ、『範例の書』、そしてティムールとの会見にも言及されている。最後にアイニーは、イブン・ハルドゥーンが醜悪な事柄で嫌疑をかけられたと注記するが、「醜悪な事柄」が何であるかは明らかでない。

アイニーのライバルであるマクリーズィーの年代記 *Kitāb al-Sulūk* には、マムルーク朝領内のイブン・ハルドゥーンについて、所々で記されている。例えば、イブン・ハルドゥーンが自伝で触れていないことであるが、彼がエジプトで成功できたのは、到着後すぐに知り合ったアミールの援助があったからだということや (*Kitāb al-Sulūk*, iii, 480, 513, 517)、ダマスクスでティムール軍に捕らえられた者たちのうち幾人かがイブン・ハルドゥーンの仲介で釈放されたこと (*Kitāb al-Sulūk*, iii, 1056) である。ただし、全体として見れば、この年代記中のイブン・ハルドゥーンへの言及は、敬愛する師へのものとしては、

驚くほど少ない。死亡録も3行足らずの、ごく簡単なものである (*Kitāb al-Sulūk*, iv, 24)。

それに対してマクリーズィーは、*Durar al-‘uqūd* では、イブン・ハルドゥーンの伝記に非常に多くのページを割いている (*Durar al-‘uqūd*, ii, 383–410)。同書における彼の主な典拠は、イブン・ハティーブの *Ihāta* とイブン・ハルドゥーンの *Ta’rīf* であるが、独自の情報も見られる。すなわち、イブン・ハルドゥーンが2度目にエジプトの首席裁判官に任命される直前に、中エジプトのファイユームのハンブーシーヤという村にいたというのである。ハンブーシーヤは、イブン・ハルドゥーンが教えていたカムヒーヤ学院の寄進地であった。イブン・ハルドゥーンも、自伝の中で、このとき「自分の穀物を収穫するため」ファイユームにいたと述べる (*Ta’rīf*, 347)。イブン・ハルドゥーンは、同学院の教授職に対する給与を寄進地から直接得ていたのであろうか。ともあれマクリーズィーは、この伝記の末尾に、イブン・ハルドゥーンから、おそらくは口頭で伝え聞いた逸話をまとめて記載している。

当時のエジプトを代表するハディース学者・法学者イブン・ハジャール・アスカラーニー Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī (1372–1449) は、複数の著書で、イブン・ハルドゥーンについて書いている。年代記 *Inbā’ al-ghumr* 中のイブン・ハルドゥーンの死亡録は、主にアイニーの *Iqd al-jumān* 中の死亡録に基づいたものである (*Inbā’ al-ghumr*, ii, 339–340)。そのためイブン・ハジャールは、イブン・ハルドゥーンの生年に関するアイニーの誤りを繰り返し、ヒジュラ暦 733 年としている。イブン・ハルドゥーンがイブン・ハジャールに与えた免状に、誕生日は 732 年第 9 月 1 日だと明記したにもかかわらずである (Ritter, “Autographs,” Plate XVII, p. 83)。 *Inbā’ al-ghumr* 中のイブン・ハルドゥーン死亡録のもうひとつの典拠は、イブン・ハティーブの *Ihāta* であるが、名祖ハルドゥーンの子の名前を ‘Abd al-Rahmān ではなく、間違って ‘Abd al-Rahīm としている。その一方、*Inbā’ al-ghumr* には、所々でイブン・ハルドゥーンへの言及があり、自伝にはない情報を提供する。例えば、マグリブからイブン・ハルドゥーンの家族と荷物を乗せた船がアレクサンドリアの沖合で難破したことは *Ta’rīf* にも記されているが、*Inbā’ al-ghumr* によれば、5 人の娘たちは溺死したものの、ムハンマドとアリーという 2 人の息子は助かったという (*Ta’rīf*, 259; 「イブン・ハルドゥーン自伝 8」, p. 81; *Inbā’ al-ghumr*, i, 291)。

イブン・ハジャールが自身の伝記集の補遺に載せたイブン・ハルドゥーン伝記は、*Inbā’ al-ghumr* 中の死亡録とほぼ同じであるが (*Dhayl*, 172–173)、彼のエジプトのカーディー列伝 *Raf’ al-iṣr* に収録された伝記は、それらとは異なり、より詳しい。*Raf’ al-iṣr* は、いまは散逸したビシュビーシー al-Bishbīshī (1361–1417/18) のカーディー列伝に主に基づいて書かれたとされる。イブン・ハルドゥーン伝記については、イブン・ハティーブの *Ihāta*、マクリーズィーの *Durar al-‘uqūd* も参照され、イブン・ハルドゥーン系譜は *Ihāta* にある通りに、そしてイブン・ハルドゥーン誕生日は 732 年第 9 月 1 日とされている。*Raf’ al-iṣr* 中の伝記はまた、ビシュビーシーによる独自の情報を伝える。すなわち、イブン・ハルドゥーンはカイロである女性と再婚したが、その女性の兄弟が不良で、問題を

起こすことが多かったという。もしかすると、さきに触れたアイニーの言う「醜悪な事柄」とは、このことを指すのかもしれない。ともあれ、全体として *Raf' al-iṣr* 中の伝記には、イブン・ハルドゥーンに対する辛辣な言葉が多く含まれている。それは、少なくとも部分的には、同書が下敷きにしたビシュビーシーのイブン・ハルドゥーンに対する厳しい見方によるものと思われる。

シリアの歴史家イブン・カーディー・シュフバ Ibn Qāḍī Shuhba (1377–1448)の年代記にも、イブン・ハルドゥーンへの言及が見られる。ダマスクス郊外におけるイブン・ハルドゥーンとティムールの会見については、その場に居合わせた人の話に基づいたという (*Ta'riḥ*, iv, 182)。また、イブン・ドゥクマークの歴史書から引用したとするイブン・ハルドゥーンに関わる逸話もある (*Ta'riḥ*, i, 130–131)。イブン・ハルドゥーンの家族の海難事故についての記事 (*Ta'riḥ*, i, 138) は、イブン・ハジャルの *Inbā' al-ghumr* の記事と内容は似ているが、細部が少々異なるので、共通の典拠 (イブン・ドゥクマークの歴史書?) をそれぞれのやり方で引用したのかもしれない。ともあれ、現在刊本として利用できるイブン・カーディー・シュフバの年代記が実は縮約版であることが明らかになっており (Reisman, “A Holograph MS”)、イブン・カーディー・シュフバの情報源やイブン・ハジャルとの関係を明らかにするには、手稿本のさらなる調査が必要である。

メッカの歴史家ファースィー al-Fāsī (1373–1429)は、イブン・アラビー Ibn al-‘Arabī (1165–1240)の伝記の中で、イブン・ハルドゥーンのスーフィズムについての見解に触れる (*al-‘Iqd al-thamīn*, ii, 178–181)。それによれば、イブン・ハルドゥーンは、初期の正統スーフィズムと後期の異端スーフィズムを区別し、イブン・アラビーを後者の支持者だとして強く非難したという。ファースィーは、イブン・ハルドゥーンの伝記を書き残していないが、『範例の書』には何度も言及している。

以上が、イブン・ハルドゥーンと面識があったかどうかはともかく、イブン・ハルドゥーンの前年に生まれ、マシュリク (エジプト以東のアラブ圏) で活動した著者たちによる伝記である。続いて、イブン・ハルドゥーン没後に生まれたマシュリクの著者たちのイブン・ハルドゥーン伝を見よう。

2.3. 後代のマシュリクの著者たち

エジプトの歴史家イブン・タグリービルディー Ibn Taghrībirdī (1409/10–70)の伝記集におけるイブン・ハルドゥーン伝記は、同書の他の多くの伝記と同様、著者の師であるマクリーズィーの *Durar al-‘uqūd* 中の伝記の要約である (*Manhal*, vii, 205–209)。イブン・サイラフィー Ibn al-Ṣayrafī (1416–94)の場合は、彼自身が明かしているように、アイニーの年代記中の死亡録に基づく (*Nuzhat al-nufūs*, ii, 221)。

エジプトのハディース学者サハーウィー al-Sakhāwī (1427/28–97)は、イブン・ハジャルの *Inbā' al-ghumr* だけでなく、*Raf' al-iṣr* やマクリーズィーの *Durar al-‘uqūd* も参照しているが、師イブン・ハジャルの見解を尊重してか、*Inbā' al-ghumr* および *Dhayl* と同様、名

祖ハルドゥーンの子の名前を‘Abd al-Raḥīm とする (*Daw*’, iv, 145–149)。彼はまた、この伝記の中に、イブン・ハルドゥーンについての他の同時代人たちのコメントもいくつか挿入している。さらに、Franz Rosenthal が示したように、サハーウィーのこの伝記集には、イブン・ハルドゥーンの活動や個人的関係に関するデータが散在する (“Ibn Khaldūn’s Biography Revisited”)。 *Daw*’の刊本のテキストは不十分であり、索引もないので、容易ではないが、今後精査されるべきである。

イブン・ハルドゥーンの死亡録について、エジプトの歴史家マラティー-al-Malaṭī (1440–1514)が依拠したのは、イブン・ハジャルの *Inbā’ al-ghumr* と、おそらくはアイニーの *Iqd al-jumān* と考えられる (*Nayl al-amal*, iii, 133–134)。しかし彼は、イブン・ハルドゥーンを、どういうわけか預言者ムハンマドと同じクライシュ族の出身としている。また、アイニーやイブン・ハジャルによるのであれば、イブン・ハルドゥーンの生年を 733 年とすべきところ、なぜか 736 年にしている。マラティーは、*Inbā’ al-ghumr* と *Iqd al-jumān* 以外にも、なにかを参照したのかもしれない。

エジプトの碩学スユーティー-al-Suyūṭī (1445–1505)は、イブン・ハジャルの *Inbā’ al-ghumr* に依拠したようである (*Husn al-muḥādara*, i, 462)。マムルーク朝最後のエジプトの歴史家イブン・イヤース Ibn Iyās (1448–ca. 1524)は、主にマラティーの *Nayl al-amal* に基づいており、前述のマラティーの間違い（あるいは他の情報源からの追加・変更?）を繰り返しているが、マクリーズィーの年代記も参照した可能性が考えられる (*Badā’i’ al-zuhūr*, i-2, 754)。

オスマン朝支配時代にシリアで活動したイブン・イマード・ハンバリ―Ibn al-‘Imād al-Ḥanbalī (1623–79)は、イブン・ハジャルの年代記 *Inbā’ al-ghumr* とイブン・タグリービルディーの伝記集 *Manhal* に基づき、イブン・ハルドゥーンの伝記を書いた (*Shadharāt al-dhahab*, ii, 76–77)。

2.4. 後代のマグリブの著者たち

イブン・ハルドゥーンの出身地であるマグリブでは、マシュリクとは異なり、16 世紀末になるまで新しいイブン・ハルドゥーンの伝記は書かれず、彼の歴史書への言及も限定的であった。

モロッコの多作家イブン・カーディー・ミクナーシー-Ibn al-Qādī al-Miknāsī (1553–1616)が、そのフェズの著名人の伝記集に入れたイブン・ハルドゥーンの伝記は、イブン・ハティーブの *Iḥāṭa* 中の伝記の要約に没年を付け加えたものである (*Jadhwat al-iqtibās*, 410–413)。

西アフリカの法学者アフマド・バーバー・ティンブクティー-Aḥmad Bābā al-Tinbukṭī (1556–1627)もイブン・ハティーブの *Iḥāṭa* とその簡約補遺、そして名前を挙げないが、サハーウィーの *Daw*’を参照している (*Nayl al-ibtihāj*, 250–252)。彼はまた、イブン・ハルドゥーンの自伝にも言及するが、それに基づいて述べるのは、イブン・ハルドゥーンがチ

ユニスに戻った際、ライバルおよびその支持者たちと揉めたということだけである。

マッカリー al-Maqqarī (ca. 1577–1632) はトレムセンに生まれ、モロッコで活動した後、フェズを離れてエジプト、シリアへと向かい、そこでアンダルス史 *Nafh al-tīb* を執筆した。したがって、彼をマグリブの著者とするのは適当ではないかもしれない。いずれにせよ、彼が同書に入れたイブン・ハルドゥーン の伝記は (*Nafh al-tīb*, vi, 171–192)、ほぼイブン・ハティーブの *Ihāta* 中の伝記の引用である。それに続けてマッカリーは、イブン・ハルドゥーン 自筆の書き込みがある、8 巻本の歴史書をフェズで見たと述べる。そして最後に、シリアの名家出身の Ibrāhīm b. Aḥmad al-Bā'ūnī (1376–1465) の記述に基づき、エジプトに移住してからのイブン・ハルドゥーン の晩年について簡単に記す。

以上を概観して、次のことが言えるであろう。

第一に、イブン・ハルドゥーン に関する「アラビア語外部史料」の重要性があらためて確認された。それらは、イブン・ハルドゥーン の私生活や公的活動について、自伝には見られない情報を含んでいる。例えば、イブン・ハルドゥーン がグラナダで妾を持っていたこと、少なくともムハンマドとアリーという 2 人の息子と 5 人の娘がいたこと、カイロで再婚したこと、収穫のために地方に出かけることがあったことなどは、「外部史料」からしかわからない。

また「外部史料」からは、イブン・ハルドゥーン についての評価を知ることができる。同時代人の多くが彼の才能と能力を讃え、彼の『範例の書』、とりわけその序説 (『歴史序説』) は当時からよく知られており、しばしば参照された。しかしながら、その一方で、同時代人の中には、彼を野心的すぎるとか頑固だとか言って批判する者も少なくなかった。それらもまた、イブン・ハルドゥーン の人格の一面であろう。

第二に、「外部史料」の相互関係を調べた結果、概して、マグリブ・アンダルスの著者たちは西方で書かれた文献を、マシュリクの著者たちは東方で書かれた文献を、それぞれ参照する傾向が見られる。そうであれば、東西アラブ圏の間に隔たりがあったと考えるべきであろうか。

しかしながら、冒頭でも述べたように、この時代、人・モノ・情報が広範に往来していた。まず、現在のような規模ではないにせよ、毎年多くのイスラーム教徒が各地から巡礼のためにメッカを訪れた。

モノでは、手稿本に関して、次のような事例がある。イブン・ハティーブは、著書 *Ihāta* の手稿本をカイロの修道院に寄贈した (Ibn Khaldūn, *Ta'rif*, 121; 「イブン・ハルドゥーン 自伝 5」, p. 85)。その後この手稿本は、さまざまな学者たちに利用された。トレムセン出身の説教師・学者イブン・マルズーク Ibn Marzūq (1310/11–79)、イブン・ハティーブの息子アリーがそれに書き込みをし (Ibn Ḥajar, *al-Durar al-kāmina*, iii, 362; al-Maqqarī, *Nafh al-tīb*, vii, 301–302)、マクリーズィーやスユーティィーもこの手稿本を読んだらしい (al-Maqqarī, *Nafh al-tīb*, vii, 106)。また、イブン・ハジャールによれば、イブン・マルズー

クの子孫が彼を訪ねて来た際に、持っていたイブン・マルズーク自筆の手稿本を贈り、大変喜ばれたとのことである (Ibn Ḥajar, *al-Durar al-kāmina*, iii, 362)。

情報といえば、遠距離であっても、知識人の間では活発な手紙のやり取りがあった。イブン・ハルドゥーンも自伝に、イブン・ハティーブからの手紙を多数収録している。

最後に、知的ネットワークは、政治的境界だけでなく、宗教的な違いを越えて広がる場合があったことも見落としてはならない。イブン・ハルドゥーンの知り合いにユダヤ教徒の医師イブン・ザルザル Ibn Zarzar がおり、イブン・ハルドゥーンがナスル朝の使者としてセビーリヤを訪れた際、当時カスティーリヤ王国に仕えていた彼は、ペドロ 1 世 (在位 1350–69) の前でイブン・ハルドゥーンのことを賞賛したという (Ibn Khaldūn, *Ta'rif*, 85; 「イブン・ハルドゥーン自伝 4」, p. 80)。

このように見えてくると、ジャンルによってネットワークや交流の様相に違いがあったのではないかと考えられる。『歴史序説』の中でイブン・ハルドゥーンは、マスウーディー (ca. 896–ca. 956) よりも後の歴史家たちを評して次のように述べる。

その後の歴史家はむしろ主題を制限し、一般的な歴史を書くことをあまりしない。すなわち、彼らはとくに自分の時代について書いたり、自分の地域に関する歴史的報告をできるだけ詳しく伝えようとしたり、彼ら自身の王朝とか都市とかの歴史に限って書く (『歴史序説』, 第 1 巻, p. 6; 文庫版, 第 1 巻, pp. 24–25)。

したがって、全般的には、ポスト・モンゴル期の歴史叙述においては東西アラブ圏の間に多少とも隔たりがあったと考えるべきなのかもしれない。しかしながら、マクリーズィーの *Durar al-ʿuqūd* のような例外的な作品もある。それらの精査が今後の課題の一つとなるだろう。また、法学、ハディース学、スーフィズム、哲学、医学、天文学など他のジャンルがどうだったのかについても検討し、「イスラーム世界」の知的ネットワークや交流の詳細を明らかにしていく必要もあるだろう。

3. おわりに

今後の課題をまとめれば、次のとおりである。第一に、上記の「イブン・ハルドゥーン諸伝」をなるべく早く論文にまとめ直し、国際学術誌に投稿することである。研究期間中に 3 度、国際学会で英語による発表をする機会があり、原稿の骨子はできているが、2018 年 12 月の学会で得たフィードバックを活かすには、なおしばらく時間が必要である。

第二に、*Durar al-ʿuqūd* 中の異国人の検討を進めることである。冒頭で述べたように、Drory の学会発表が、題目から見て、当初予定していた研究と似ていたため、計画を変更した。しかし、2018 年末に Drory から学会発表原稿を見せてもらったところ、取り上げられている人物の数が少なく、典拠の検討も十分にはなされていなかった。したがって、研究の余地はまだありそうである。また、マクリーズィーがこのような伝記集を書いたのは、マスウーディー以降の歴史家たちに対するイブン・ハルドゥーンの上記の言葉を批判的に受け止めたからではないかと考えるに至り、その点を掘り下げてみるつもりで

ある。

第三に、「アラビア語文化圏」あるいは「アラビア語文芸共和国」という概念の妥当性を検証することである。上述の通り、歴史叙述においては東西アラブ圏の間に隔たりがあったのかもしれない。しかし、その一方で、モンゴル帝国支配時代以降、イラクの東部および北部に「ペルシア語文化圏」が成立し、そこで書かれたペルシア語史書は、イラクよりも西のことについてほとんど触れることがない。イブン・ハルドゥーンについても、「ペルシア語文化圏」では知られていなかったのではないかと思われる。いずれにせよ、マムルーク朝の知識人たちの東方および西方との関係を多角的に考察し、彼らの知的ネットワークの広がりを明らかにすることが求められる。この点では、共同研究プロジェクトが現在進行中である。

謝辞

本稿は、公益財団法人 JFE21 世紀財団 2017 年度アジア歴史研究助成による成果の一部である。財団の関係者の皆様、審査にあられた先生方に、あらためて感謝申し上げます。

《参考文献》

- Aḥmad Bābā al-Tinbuktī, *Nayl al-ibtihāj bi-taṭrīz al-Dībāj*, Tripoli (Libya), 1989.
- Al-ʿAynī, *Iqd al-jumān fī taʾrīkh ahl al-zamān*, MS Ahmet III 2911/a19 (Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Istanbul).
- Al-Fāsī, *al-Iqd al-thamīn fī taʾrīkh al-balad al-amīn*, ed. Fuʿād Sayyid et al., 8 vols., Cairo, 1985–86.
- Ibn al-Aḥmar, *Kitāb Mustawdiʿ al-ʿalāma wa-mustabdiʿ al-ʿallāma*, ed. Muḥammad al-Turkī al-Tūnisī/ Muḥammad b. Tāwīt al-Ṭitwānī, Rabat, 1964.
- Ibn al-Furāt, *Taʾrīkh al-duwal wal-mulūk*, ed. Costi K. Zurayk/ Nejla Izzeddin, vols. 7–9, Beirut, 1936–42.
- Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī, *Dhayl al-Durar al-kāmina*, ed. ʿAdnān Darwīsh, Cairo, 1992.
- , *al-Durar al-kāmina fī aʿyān al-miʿa al-thāmina*, 4 vols., Beirut, 1992.
- , *Inbāʿ al-ghumr bi-anbāʿ al-ʿumr*, ed. Ḥasan Ḥabashī, 4 vols., Cairo, 1969–98.
- , *Rafʿ al-iṣr ʿan qudāt Miṣr*, ed. ʿAlī Muḥammad ʿUmar, Cairo, 1998.
- Ibn Ḥijjī, *Taʾrīkh Ibn Ḥijjī*, ed. Abū Yaḥyā ʿAbd Allāh al-Kundurī, Beirut, 2003.
- Ibn al-ʿImād al-Ḥanbalī, *Shadharāt al-dhahab fī akhbār man dhahab*, 8 vols., Beirut, n.d.
- Ibn Iyās, *Badāʿiʿ al-zuhūr fī waqāʿiʿ al-duhūr*, ed. Muḥammad Muṣṭafā, 5 vols., Cairo/Wiesbaden, 1960–75.

- Ibn Khaldūn, *The Muqaddimah: An Introduction to History*, tr. Franz Rosenthal, 3 vols., New York, 1958; 森本公誠 (訳・解説) 『歴史序説』, 3 巻, 岩波書店, 1979–87; 4 巻, 岩波文庫, 2001.
- , *al-Taʿrīf bi-Ibn Khaldūn wa-riḥlatuhu gharban wa-sharqan*, ed. Muḥammad b. Tāwīt al-Ṭanjī, Cairo, 1951; 佐藤健太郎ほか (訳) 「イブン・ハルドゥーン自伝 1–8」『イスラーム地域研究ジャーナル』1 (2009), pp. 47–58; 2 (2010), pp. 35–55; 3 (2011), pp. 47–72; 4 (2012), pp. 65–98; 5 (2013), pp. 77–102; 6 (2014), pp. 31–49; 7 (2015), pp. 40–56; 8 (2016), pp. 64–91.
- , *Taʾrīkh al-ʿallāma Ibn Khaldūn: Kitāb al-ʿIbar*, 7 vols., Beirut 1966–78.
- Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥāṭa fī akhbār Gharnāṭa*, ed. Muḥammad ʿAbd Allāh ʿInān, 4 vols., Cairo, 1965; repr. 1973.
- Ibn al-Qāḍī al-Miknāsī, *Jadhwat al-iqtibās fī dhikr man ḥalla min al-aʿlām madīnat Fās*, Rabat, 1973.
- Ibn Qāḍī Shuhba, *Taʾrīkh Ibn Qāḍī Shuhba*, ed. ʿAdnān Darwīsh, 4 vols., Damascus, 1977–97.
- Ibn al-Ṣayrafī, *Nuzhat al-nufūs wal-abdān fī tawārīkh al-zamān*, ed. Ḥasan Ḥabashī, 4 vols., Cairo, 1970–94.
- Ibn Taghrībirdī, *al-Manhal al-ṣāfi wal-mustawfi baʿd al-Wāfi*, ed. Muḥammad Muḥammad Amīn/ Nabīl Muḥammad ʿAbd al-ʿAzīz, 13 vols., Cairo, 1984–2009.
- Al-Malaṭī, ʿAbd al-Bāsīt b. Khalīl, *Nayl al-amal fī dhayl al-Duwal*, ed. ʿUmar ʿAbd al-Salām Tadmurī, 9 vols., Sidon/Beirut, 2002.
- Al-Maqqarī, *Nafḥ al-ṭīb min ghuṣn al-Andalus al-raṭīb*, ed. Iḥsān ʿAbbās, 8 vols., Beirut, 1968; repr. 1988.
- Al-Maqrīzī, *Durar al-ʿuqūd al-farīda fī tarājim al-aʿyān al-mufīda*, ed. Maḥmūd al-Jalīlī, 4 vols., Beirut, 2002.
- , *Kitāb al-Sulūk li-maʿrifat duwal al-mulūk*, ed. Muḥammad Muṣṭafā Ziyāda/ Saʿīd ʿAbd al-Fattāḥ ʿĀshūr, 4 vols., Cairo, 1934–73.
- Al-Sakhāwī, *al-Ḍawʿ al-lāmiʿ li-ahl al-qarn al-tāsiʿ*, 12 vols., Beirut, n.d.
- Al-Suyūṭī, *Ḥusn al-muḥādara fī taʾrīkh Miṣr wal-Qāhira*, ed. Muḥammad Abū l-Faḍl Ibrāhīm, 2 vols., Cairo, 1967–68.
- Alatas, Syed Farid, *Ibn Khaldun*, Oxford, 2013.
- Grammatico, Daniele, “El periplo humano de Ibn Jadūn,” *Exposicion: Ibn Jaldūn. El Mediterráneo en el siglo XIV: Auge y declive de los Imperios*, Granada, 2006, pp. 148–157.
- Drory, Joseph, “Foreign Rulers in al-Maqrīzī’s Biographical Dictionary *Durar al-ʿUqūd*,” paper presented in May 2013 in the 22nd. International Colloquium on the History of Egypt

- and Syria in the Fāṭimid, Ayyūbid and Mamlūk Eras at Ghent University, Belgium.
- Fischel, Walter J., *Ibn Khaldūn and Tamerlane*, Berkeley, 1952.
- , “Ibn Khaldūn’s *Autobiography* in the Light of External Arabic Sources,” *Studi orientalistici in onore di Giorgio Levi della Vida*, Rome, 1956, pp. 287–308.
- , *Ibn Khaldūn in Egypt*, Berkeley/Los Angeles, 1967.
- Fromherz, Allen James, *Ibn Khaldun, Life and Times*, Edinburgh, 2010.
- , “Ibn Khaldūn, Ibn al-Khaṭīb and Their Milieu: A Community of Letters in the Fourteenth-Century Mediterranean,” *Medieval Encounters* 20/4-5 (2014), pp. 288–305.
- 羽田正『イスラーム世界の創造』, 東京大学出版会, 2005.
- 長谷部史彦「バフマニー朝アフマド1世によるカイロへのサダカ送付」『オリエント』47/2 (2004), pp. 141-145.
- Hodgson, Marshall G. S., *The Venture of Islam*, 3 vols., Chicago, 1974.
- Irwin, Robert, *Ibn Khaldun: An Intellectual Biography*, Princeton/Oxford, 2018.
- 伊藤隆郎「サハーウィーの参照した歴史関連文献」『西南アジア研究』47 (1997), pp. 22–38.
- Ito, Takao, “Al-Maqrīzī’s Biography of Tīmūr,” *Arabica* 62 (2015), pp. 308–327.
- , “A Collection of Histories of the Mamluk Sultanate’s Syrian Borderlands: Some Notes on the Manuscript Ahmet III 3057 (TSMK, Istanbul),” *The Mamluk Sultanate and Its Periphery*, ed. Frédéric Bauden, Leiden, 2019 [in press].
- Knysh, Alexander D., *Ibn ‘Arabi in the Later Islamic Tradition*, Albany, N.Y., 1999.
- Massoud, Sami G., *The Chronicles and Annalistic Sources of the Early Mamluk Circassian Period*, Leiden/Boston, 2007.
- 森本公誠『人類の知的遺産 22 イブン=ハルドゥーン』, 講談社, 1980; 『イブン=ハルドゥーン』, 講談社学術文庫, 2011.
- 「イブン=ハルドゥーンの見たエジプトの司法界」『中近東文化史論叢：藤本勝次・加藤一朗両先生古稀記念』, 関西大学文学部史学地理学科合同研究室, 1992, pp. 135–162; Morimoto, Kosei, “What Ibn Khaldūn Saw: The Judiciary of Mamluk Egypt,” *Mamlūk Studies Review* 6 (2002), pp. 109–131.
- Ritter, Helmut, “Autographs in Turkish Libraries,” *Oriens* 6/1 (1953), pp. 63–90.
- Reisman, David C., “A Holograph MS of Ibn Qāḍī Shuhbah’s “*Dhayl*,”” *Mamlūk Studies Review* 2 (1998), pp. 19–49.
- Rosenthal, Franz, “Translator’s Introduction” to Ibn Khaldūn, *The Muqaddimah*, vol. 1, pp. xxvii–cxv.
- , *A History of Muslim Historiography*, 2nd. ed., Leiden 1968.
- , “Ibn Khaldun in his Time,” *Ibn Khaldun and Islamic Ideology*, ed. Bruce B. Lawrence, Leiden, 1984, pp. 14–26.
- , “Ibn Khaldūn’s Biography Revisited,” *Studies in Honour of Clifford Edmund Bosworth*.

Volume 1. Hunter of the East: Arabic and Semitic Studie, ed. Ian Richard Netton, Leiden et al., 2000, pp. 40–63.

Shatzmiller, Maya, *L'Historiographie Mérinide: Ibn Khaldūn et ses contemporains*, Leiden, 1982.